要介護者とその家族のデイサービス利用に対する抵抗感の研究
A study on resistance to use of day services by individuals requiring care and their families

上野　佳代
（桜美林大学加齢・発達研究所）

要旨

本研究は要介護者とその家族のデイサービス利用に対する抵抗感や介護意識の実態を把握することを目的とした．調査対象は，背景の異なる要介護者とその家族に対して，方法は半構造化面接を用いた内容分析法による探索的分析を行った．

その結果，要介護者のデイサービスへの抵抗感として【デイサービスに対する否定的感情】【デイサービス内容・環境への否定的感情】【要介護者の症状や障害に影響した生活不安の感情】【介護者に対する思い・希望】【要介護者の生活心情】【自分にとっての安心できる場所・自分に合った生活スタイルとのギャップへの感情】が得られた．家族の抵抗感は，家族（夫）に限って【デイサービスに対する否定的感情】【デイサービス内容・環境への否定的感情】が 明らかになった．要介護者と家族の抵抗感を考慮した利用への介入をするための資料となるものと考えられる．

キーワード：要介護者，家族介護者，デイサービスへの抵抗感，介護意識

1. 緒言

介護保険制度は，2000年に開始され，それまでの措置制度であった行政主体の制度から利用者主体の契約制度に変化した．制度開始から10年以上を経過し，利用を希望する高齢者の生活をサポートするサービスとして定着してきた．平成23年6月現在，要介護（要支援含む）認定者数512万人のうち介護保険サービスの利用者は，居宅（介護予防），地域密着型（介護予防）サービス，施設サービスを合わせて423万人となっている[1]．一方，利用者や家族のサービス利用意識では，「お役所の世話にはなりたくない」「介護は家族の手で行うのが当然」といったサービス利用に抵抗を感じ躊躇するケースは今でも存在している[2]．介護保険サービス利用決定については，家族や，介護支援専門員（以後ケアマネとする）の意向で決められるなど高齢者自身の自己決定に問題があるといわれている[3]．

介護保険サービスの利用を規定する要因として多く用いられるアンダーセンモデル[4] では，保健医療サービスの利用を規定する4つの要因すなわち素因（性・年齢など），客観的必要性

（ADL・IADL・病名など）利用促進要因（サービス内容・利用料など），主観的必要性（必要性の認知・利用希望）があり，ニード要因が利用促進要因となることを示されるが，素因の説明力が低い，家族の心身のニーズや意識要因を視野に入れていないという指摘がされている[5]．介護保険サービスにおけるデイサービスに対する抵抗感については，デイサービスの利用を決定する要因としてとらえられている[6) 7) 8) 9)]．抵抗感として表現される先行研究を概観すると，抵抗感と表現されているものと介護意識と表現されるものがある．抵抗感と表現される先行研究として，第1に，お役所の世話になりたくないと表現される制度利用への抵抗感を示す制度的抵抗感，制度やサービスを利用しないサービス享受抵抗感．サービス利用への抵抗感は，世間体だけでなく道徳意識や，性役割意識の影響を受ける[6]といわれている．第2に職員・利用者などを含む人と関わることに対して躊躇する気持ちや，世間体など周囲の目を気にする対人的抵抗感[2]がある．

要介護者や家族の介護意識としては，第1に介護は「家族の手で」や，「長男の嫁が行うべき」と子が介護を行うことを当然視して家族に過大な期待をかけるといった伝統的家族意識[5]，第2に「介護は女性が担うべき」「女性の仕事」とみなす伝統である性役割意識[6) 7)]，第3に「親の介護は子どもとして当然のこと」「親が子どもに介護を望む事は当然」といった老親扶養義務感がある[10]．

要介護者，家族である介護者を同時に行った研究[11) 12) 13)]には，たとえば，要介護者とその家族のデイサービス利用に対する躊躇する要因について，筆者がケアマネに行った調査では要介護者と家族のデイサービスへの躊躇する要因（抵抗感）の有無がデイサービス利用・非利用に影響する可能性や，介護者である家族がデイサービスへ否定的な感情がある場合，介護の抱え込みの可能性[12]を明らかにしている．また，ケアマネが認識する困難事例の調査では[14]，本人がサービス利用に抵抗が強い，家族が必要なサービスの受け入れを拒否するなどの「家族の意見の不一致」が指摘されている．しかし，要介護者とその家族当事者の抵抗感の関係をみた研究はない．要介護者とその家族のデイサービス利用に対する抵抗感や，介護の意識とその関係の実態を把握することは，ケアマネを含めた保健医療福祉従事者が，高齢者やその家族が必要なサービスの適切な利用へと繋げる際，また困難な事例の介入の示唆を得るための基礎資料となると考えられる．

そこで，本研究では要介護者とその家族当事者のデイサービスに対する抵抗感や介護意識の実態を把握しその関係を検討することを目的とした．

2. 用語の定義

デイサービスを主とする介護保険サービスを利用するときに生じる「躊躇する」「抵抗を感じる」感情を，「抵抗感」と表現し，本研究において便宜的に「デイサービス利用における抵抗感」と定義する．

抵抗感に影響する世間体や介護に関する価値観を介護意識と表現した．先行研究を引用する

場合，研究者の表現をそのまま利用することとする．

3．研究方法

1）調査の対象

調査の対象は，在宅で家族と居住している要介護者とその家族である．デイサービスを利用していない要介護者とその家族3組，デイサービスを利用している要介護者とその家族2組である．調査対象は，A地区，B地区のケアマネ，本人と家族ともに協力が得られたペアケースとした．また，デイサービスを取り入れたいが利用していない要介護者とその家族の選定を依頼した．要介護者については，自らのデイサービス利用の意思や感情を把握するため，認知症や失語症によるコミュニケーションに支障のない要介護者とした．キーパーソンは，家族属性として、夫，妻，娘，息子，子の妻など異なった属性のキーパーソンを依頼した．今回得られた家族は，夫，妻，娘である．

2）研究調査期間

平成19年9月から10月

3）データ収集方法

(1) 要介護者に半構造化面接でのインタビュー調査を行う．（1時間程度）
(2) 家族に半構造化面接でのインタビュー調査を行う．（1時間程度）
(3) 一部家族に対して留め置き法による質問紙による調査を行う．
(4) 要介護者と家族へのインタビューは本人あるいは家族が気兼ねなく意見を述べることができるよう配慮した．研究者が要介護者へインタビュー中には，研究協力者が家族と談話するようにした．

4）調査内容

(1) デイサービス利用することへの躊躇する気持ち（抵抗感）はあるか
(2) 利用に抵抗を感じる場合どのようなことに抵抗を感じるか．（抵抗を感じる内容）
(3) (2) で答えた内容についてなぜそのように思うのか．
(4) デイサービスについてどのようなイメージを持っているか．
(5) 要介護者に対して①性別②年齢③同居家族④有する疾患や障害⑤要介護度⑥老研式活動能力指標⑦デイサービス利用決定を誰が行ったか⑧現在のデイサービス利用状況．
(6) 家族に対して①年齢②本人との続柄③家族の身体状況④デイサービス利用決定における要介護者本人の意思重視の有無．

5）分析方法

内容分析の手法[15)16)]を用いて以下の手順にそって分析した．まず，要介護者とその家族個々人における抵抗感についてインタビューメモ及び録音したインタビューテープから，要介護者とその家族における逐語記録を作成した．

(1) 第一段階；個々の逐語録から要介護者とその家族に対して，インタビューで語られた内容についてひとつの意味を含む文脈を抽出した．

(2) 第二段階；要介護者とその家族それぞれに対して抽出した文章から抵抗感に関係する文（コード）を抽出した．原則として1つのコードには1つの意味しか含まれないようにした（コード化）．

(3) 第三段階；要介護者とその家族それぞれに対して，抽出された全てのコードを同様の意味を含むコードに類型化し，それぞれに命名した（個別のサブカテゴリ化）．

(4) 第四段階；個々の逐語録から抽出された全ての個別のサブカテゴリを共通の意味をもったものごとに類型化し，それぞれに命名した（全体のサブカテゴリ化）．

(5) 第五段階；命名した全体のサブカテゴリを共通の意味をもった全体のサブカテゴリごとに類型化し，それぞれに命名した（カテゴリ化）．

(6) 第六段階；カテゴリ化したものを統合した中核カテゴリをコアとした．

質的研究では，研究者の主観が入りやすく信頼性に影響する．そこでカテゴリ名表現の検討については看護及び老年学の専門家と高齢者と関わるケアマネとの検討を行った．

4. 倫理的配慮

研究の協力の得られた事業所，ケアマネに対して，研究の趣旨を直接口頭かつ書面により説明し承諾書への署名を得た．さらに，要介護者とその家族に対して研究の趣旨を直接口頭かつ書面により説明し，個人情報にかかわるすべてのデータに対し，研究目的以外には利用しないこと，インタビューで回答したくない項目には答えなくてもよいこと，途中で中断あるいは中止も可能であることについて説明を行い承諾書への署名を求めた．また，了承の得られた対象者とその家族のインタビューの録音を行った．得られたデータはパスワード管理を行い，研究終了後破棄することとした．1組の家族については，家族の意向でインタビューではなく，留め置き法による調査用紙記載による郵送とした．

5. 結果

インタビューにより得られたケースとして在宅で要介護認定を受けて生活しているデイサービスを利用していない要介護者とその家族3組，デイサービスを利用している要介護者とその家族2組であった．まず対象者の概要を示し，次に要介護者の抵抗感とその家族の抵抗感と

介護意識についての内容分析の結果を示す.

1）対象者の概要

本研究における要介護者は，平均年齢76.4歳，男性１名女性２名である．要介護者の要介護状態となった主たる疾患は，脳血管疾患２名，骨折，筋力低下など１名であった．要介護度は，インタビュー時，要支援２（１名）要介護１（２名）　要介護３（１名）であった（表1）.

主たる介護者である家族の平均年齢は61.4歳であった．家族は妻が２名，娘２名，夫１名であった．そのうち１組は，家族（夫）も要介護（要支援2）であった（表2）．要介護者ＡからＥは，家族ａからｅと対比している.

表１　要介護者の属性

要介護者本人（性別）	年齢	同居家族	要介護の原因既往歴など	要介護度	老研式活動能力指標＊1注記	デイサービスの利用決定	抵抗感	デイ利用有無
A（女）	83	娘・その夫中学・高校の孫	肥満・筋力低下糖尿病	要介護1	0・2・1／3	娘	なし	デイーサービス1／週デイケア１／週
B（男）	61	妻	くも膜下出血左不全麻痺	要介護3	1・3・0／4	妻話し合いをする	なし	デイーサービス1／週デイケア１／週その他有料のパワーリハビリ
C（女）	80	妻	脳梗塞（後遺症なし）	要支援2	4・3・0／7	本人	あり	利用していない
D（男）	75	妻・成人息子・弟	脳梗塞右半身麻痺	要介護3	0・1・1／2	本人	あり	利用していない
E（女）	83	娘・その夫大学院生の孫	骨折（肩・股関節）腹膜炎手術	要介護1	0・2・1／3	本人	あり	利用していない

＊1注記　老研式活動能力指標
「手段的自立」・「知的能動性」・「社会的役割」／合計

表2　家族の属性

家族	年齢	介護者	介護者の身体症状など	利用者の意見重視の有無	抵抗感	デイ利用有無
a	47	娘	特になし	どちらかといえば重視する	なし	デイーサービス1／週 デイケア1／週
b	60	妻	腰痛	とても重視する	なし	デイーサービス1／週 デイケア1／週 他有料のパワーリハビリ
c	83	夫	脳梗塞 右半身麻痺	とても重視する	あり	利用していない
d	67	妻	腰痛	今の所とても重視する	なし	利用していない
e	50	娘	特になし	とても重視する	なし	利用していない

2）要介護者のデイサービスに対する抵抗感

在宅で生活して要介護認定を受けている要介護者において，デイサービスへの抵抗感のインタビューから得られた内容は，要介護者のデイサービスに抵抗感を感じる要素を示すカテゴリとして6コア，18カテゴリ，34サブカテゴリ，80コードであった（表3）.

【デイサービスに対する否定的感情】では，デイサービスそのものを利用したくない嫌悪感に似た感情が表出された.【デイサービス（施設）におけるデイサービス内容・環境への否定的感情】では，プログラム内容への不満，利用者の年齢が要介護者よりも高齢者が利用するイメージから年齢層が合わないといった人的環境についての否定的感情が表出されていた.【要介護者本人の症状や障害に影響した生活不安の感情】では脳梗塞での不自由さのほか，難聴や，下痢気味であるという排泄に対する不安があることがデイサービス利用を抵抗する感情につながっていた.【介護者に対する思い・希望】では，家族に看てもらいたい気持ちから利用をしたくないという気持ちと迷惑かけたくない気持ち，家族への感謝の気持ちが表現された.【本人の生活心情】では，要介護者が元々人とのかかわりを望まないことや，退職以前の職業に関連のあるしたいことがあり，デイサービスを利用しない生活を望むことが表現された.【自分にとって安心できる場所・人・自分にあった生活スタイルとのギャップ】では，デイサービスには慣れた家族がいない，デイサービスでは思い通りに過ごせずしたくないことをさせられる不満，自分の家で過ごしたいという気持ちが表現された．そのほか，抵抗感とは反する感情についても表現された．自宅での家族の介護体制が十分あるいは，介護に支障を感じデイサービスでの入浴が安心といった介護への気持ちである．また，よくなりたい自分への希望など，デイサービスを利用することへの抵抗する感情が表現されるその反対に機能の衰えを回復したい気持ちから，機能訓練の充実したデイサービスに期待する感情がみられた.

表３　要介護者の抵抗感

コア	カテゴリ	サブカテゴリ	コード数
デイサービスに対する否定的感情	デイサービスを利用したくない気持ち	デイサービスを利用したくない	1
デイサービス（施設）におけるサービス内容・環境への否定的感情	プログラム内容への不満	内容が不満	
	利用者年齢が合わない	年齢層が合わない	
	施設環境への不満	施設の温度調節が合わない	4
要介護者本人の症状や障害に影響した生活不安の感情	デイサービス利用時身体症状が出現の不安の有無	身体症状への不安	4
介護者に対する思い・希望	家族に看てもらいたい気持ち	娘に看てもらいたい	
		娘への依存心が強い	
	家族に迷惑をかけたくない気持ち	家族の助言を聞く気持ちがある	
		家族に迷惑をかけたくない	
		家での介護に感謝している	9
本人の生活心情	人とのかかわりを好むかどうか	人とのかかわりを好む	
		誘われても行かない	
	職業の影響	元職業が今したいことである	
		好きというよりそれしかない	
		自営業で家にいた時間が長い	
	性格の影響	自分を持っている	
	季節によって外出が制限される	暑いと外出が思うようにできない	10
自分にとっての安心できる場所・人・自分に合った生活スタイルとのギャップ	デイサービス（施設）は，安心できる介護者（家族）がいないと感じる気持ち	慣れた介護者が看ている	
		亡くなった夫の薦めを参考にする	
		医療従事者が身近にいる	
	デイサービスは自分の思い通りでなくしたくないことをさせられ満足できない気持ち	デイサービスは気に入った場所で好きなことをして過ごせない	
		したくないことをさせられることがいや	
	自分の好きな場所（家）にいたいという気持ち	自宅での気に入った生活をしたい	
	機能が衰えることを回復したい気持ち	さらに機能が衰えることがいやで回復したい	
	自宅での介護体制が十分ではない	日中一人での過ごし方に満足できない	
		外出が思うようにできない	
		自宅入浴が不安でデイサービス（施設）入浴が安心	
	自宅で介護する体制が十分である	自宅で看る体制が取れる	
		炊事が自分と家族でまかなえる	
		日中一人でも困らない	
		介護者の介助で外出ができる	
	よくなってなりたい自分への希望，もどかしさ	なりたい自分が今の自分ではない	
		自分では生活リハビリができずリハビリができる場所を模索	
		やりたいことが今はできない	52

3）家族のデイサービスに対する抵抗感と介護意識

家族については抵抗感と介護意識で構成されていた．家族のデイサービスへの抵抗感を示すカテゴリは，2コア，4カテゴリ，4サブカテゴリ，10コードであった（表4）．

まず，家族がデイサービスへの抵抗感を示したのは本調査においては，家族が夫であるケースのみであった．【デイサービスに対する否定的感情】ではデイサービスを利用したくない否定的な感情が表現された．【デイサービス（施設）におけるデイサービス内容・環境への否定的感情】では，プログラム内容の不満，利用者の年齢が合わない，特別養護老人ホームでのデイサービスをヘルパーが薦めないといった家族にかかわる従事者の情報の影響が表現されていた．

表4　家族の抵抗感

コア	カテゴリ	サブカテゴリ	コード数
デイサービスに対する否定的感情	デイサービスを利用したくない気持ち	デイサービスを利用したくない	2
デイサービス（施設）におけるサービス内容・環境への否定的感情	プログラム内容への満足の有無	内容が不満	
	特養デイサービスへの否定的情報	特養に行くことをヘルパーがすすめない	
	年齢層が合わない	利用者と年齢の差が大きい	6

次に，介護意識を示すカテゴリとして，3コア，7カテゴリ，19サブカテゴリ，37コードが抽出された（表5）．家族から得られた介護意識として得られた内容は【介護者は要介護者自身がどうしたいのかを汲み取り〈行かせられない〉と思う気持ちが生じる】があった．家族は，施設は本人の思い通りに過ごせない，本人が興味のないことや嫌がることを無理にさせてはいけないという気持ちからデイサービスへ行かせられないという介護意識を示す感情が表現されていた．また，家族はデイサービスを利用することについて【デイサービスはかならずしも利用する必要はない】と感じ，デイサービス利用をしていない状況がみられた．

表5－1　家族の介護意識

コア	カテゴリ	サブカテゴリ	コード数
本人にとってどうしたいか汲み取り行かせられない	デイサービス時の身体症状出現による不安から行きたくないと思うだろう	身体症状を配慮して本人が行きたくないと思うだろう	
	本人にとってどうしたいか汲み取って行かせられない	本人がどうしたいと思っているのか考えている	
		以前利用していた本人から聞いた感想の影響	
		本人が興味を持たず行きたがらない	15

表5−2　家族の介護意識

コア	カテゴリ	サブカテゴリ	コード数
必ずしもデイサービスを利用しなくてよい	必ずしもデイサービスを利用しなくてよい	日中一人でも，本人が身の回りのことを介助なく出来ている	
		日中一人でも安全面に不安がない	
		本人が歩行機能維持への練習を行っている	
	デイサービス利用に対する家族の意識	必ずしも行く必要のないところ	
		介護者が積極的に利用する気持ちを持っている	5
デイサービスへのニーズ	家族がデイサービスを必要と感じる理由がある	本人の機能面の衰えへの心配をし，デイなどの外出が必要と感じている	
		家族からみて足の筋力の衰えがある	
		今までの生活から変化し心配	
		人とのかかわりが減ったことへの心配	
		自宅での入浴の見守りが困難になった	
		高次脳による一人での外出への心配	
	デイサービスへの期待	運動機能を維持させたい	
		リハビリで元気になりことを期待する	
		今より以上のリハビリを求める	
	介護・見守りの開放を希望	介護者の身体面の不安があり見守り，介護からの開放を希望	17

6. 考察

1）要介護者の抵抗感

【デイサービスに対する否定的感情】として，要介護者のデイサービスに対する抵抗感として得られた内容であるデイサービスを利用したくない気持ちは，デイサービスを利用するのがいやという表現から，デイサービスそのものに対する嫌悪感を示す否定的感情であると考えられた．この【デイサービスに対する否定的感情】は先行研究のサービス享受抵抗感[2]と合致している．また，自分のしたいことではないことをさせられることに対してデイサービスへの嫌悪感に繋がっていると考えられ，スティグマすなわち［したくないことしなければならないこと］への不名誉な気もち[9]を示し，自分の思い通りに過ごせない不満が生じると考えられた．

【デイサービス（施設）におけるサービス内容・環境への否定的感情】では、プログラム内容への不満や利用者年齢が合わない，施設環境への不満があげられた．サービス内容や，デイサービス（施設）に対する不満として表出される否定的感情が，デイサービス利用に抵抗感を感じ，デイサービスを利用しないことにつながると考えられた．

【要介護者本人の症状や障害に影響した生活不安の感情】では，デイサービス利用時の身体

症状の出現への不安としては，脳梗塞などの不自由さの他，聴こえづらさによる対人関係の不安や，頻尿，便秘による排泄への不安が表出された．要介護者自身が，生活上の支障に対する苦痛や不安が強いと，デイサービスで過ごすことを困難に感じデイサービス利用に躊躇することが考えられる．

【自分にとっての安心できる場所・人・自分に合った生活スタイルとのギャップへの感情】として，自分の好きな場所（家）にいたいという気持ちやデイサービスは安心できる介護者（家族）がいないと感じる気持ちがみられた．要介護者にとって安心できるとは，生活機能面で不自由さが生じても，自分に慣れた介護者がそばに居て思い通りに過せることが望みであると考えられる．頻尿，便秘など排泄への不安がある場合，要介護者が自分の身体症状をよく周知している家族のいる家を望む可能性があり，本研究結果では家族はその意思を尊重しデイサービスを利用しない選択をしていると考えられた．特に，排泄という羞恥心が伴う生活行動への介入が必要な場合，スタッフと家族とが連絡をとりあい要介護者が安心できることが肝要であろう．

【本人の生活心情】では，人とのかかわりを好むかといったそれまでの生きてきた過程での対人関係に関する心情の影響が考えられ，先行研究の対人的抵抗感[2]に一致していた．高齢者の場合，今までの対人関係のほか，聴力など加齢に伴う変化に対する不安が対人的抵抗感に影響することが考えられる．また，職業の影響，性格の影響として定年までに行っていた仕事内容に関することことが今どのように過ごしたいかに影響することが考えられた．その場合，家で過ごすことに満足していることでデイサービスの利用をする必要性を感じないことが考えられた．そのため，デイサービスに対してしたくないことをさせられるところといった嫌悪感に似た感情を表出されていた．デイサービスに対してニーズのない要介護者の場合，デイサービスのプログラム内容が，今までの職業や，趣味，興味と合致しなければ，否定的感情が生じる可能性が考えられた．

次に，機能が衰えることを回復したい気持ち，よくなりたい自分への希望もどかしさを感じている場合，自宅での介護体制が十分ではない，一人で日中過ごすことを困難に感じていても要介護者本人が，日中一人でも困らないことや自宅で看る体制が取れる場合，要介護者，家族共にデイサービス利用への必要性を感じず利用へと繋がらないと考えられた．デイサービスの利用は，デイサービスへの抵抗感，介護体制，ニーズが影響しあうと考えられる．一方，機能を回復したいという気持ちからよりよい機能訓練ができるデイサービスの利用を模索している結果はデイサービスを利用しているケースから得られたものであった．デイサービスを利用している要介護者では，デイサービスについて当初抵抗感が全くなかったわけではないことが考えられ，デイサービス利用者の利用への感情や意識の検討はデイサービスに抵抗を感じ利用へとつながらない困難事例への介入の示唆を探るには不可欠な資料となると考えられた．

更に【家族に対する思い・希望】として，家族に見てもらいたい気持ちがみられた．これは，親が子どもに介護を望む事は当然のことといった老親扶養義務感であると考えられた[8]．今回の結果では，要介護者（母）はデイサービスを利用したことがあるが，娘と同居することにな

ってから，自宅で好きに過ごすことへの安心感，家族に見てもらいたい気持ちが強くなり，家族（娘）への介護を希望し，出先から何度も電話をしなければ安心できないほど依存心が表出されていた．老親扶養義務感は，女性に比較して男性が高い，介護の負担感は男性に比べて女性の方が高い[17]といわれる．娘である家族は【家族は要介護者自身がどうしたいのかを汲み取り〈行かせられない〉と思う気持ち】が生じることでデイサービスを利用しない選択をされていたが，介護の負担を感じ，ケアマネに相談していた．介護者が娘，息子の場合，過去の世話への感謝の気持ちから親を介護するのが当然と考える可能性があり，介護の負担感を感じても知らず知らずに我慢することが考えられる．介護の抱え込み・介護虐待への移行の可能性も視野に入れる必要がある．家庭内での高齢者虐待の実態の研究[18]では，虐待は訪問をしなければ顕在化しない，その背景には「たいていのことは親子で許される」といった伝統的な価値観である「家」意識の強さが関与すると指摘している．介護者が娘・息子の場合は，更なる検討が必要であろう．

抵抗感に関する先行研究とは合致しない，本結果からの新たな知見として【自分にとっての安心できる場所・人・自分に合った生活スタイルとのギャップへの感情】である自分の好きな場所（家）にいたいという気持ちやデイサービスは安心できる家族がいないと感じる気持ちがみられた．自分の生活スタイルとのギャップという感情の表出は，デイサービスが自分の過ごしたい場所でない場合，デイサービスを利用しない可能性が考えられる．すなわち，高齢者自身がどのように過ごしたいのか，どこで過ごしたいのかといった過ごし方やその場所での居心地がデイサービスで得られなければデイサービス利用に抵抗を感じるというより日中過ごす居場所として選択することに抵抗を感じる可能性があると考えられよう．

2）家族の抵抗感

家族の抵抗感として【デイサービスに対する否定的感情】がみられたのは，限られたケースの結果である．家族（夫）自身も要支援の認定を受けていることから，デイサービスを要介護者に向けてではなく，まず自らに置き換え利用に対する否定的な感情を表現したと考えられる．そして【家族は要介護者自身がどうしたいのかを汲み取り〈行かせられない〉と思う気持ちが生じる】ことで要介護者の意思を尊重し，デイサービス利用をしない選択をしていると考えられた．

家族介護者が妻，娘についてはデイサービスに対する抵抗感は表現されなかった．家族における抵抗感が表出されるのは，介護形態が高齢世帯や老老介護，家族である介護者の年齢などどのような家族であるかについては今回のケースに限ってである．さらに積み重ねた検討をする必要がある．

家族の介護意識として【家族は要介護者自身がどうしたいのかを汲み取り〈行かせられない〉と思う気持ちが生じる】がみられた．家族は，要介護者にとってのデイサービス利用を検討し，【家族は要介護者自身がどうしたいのかを汲み取り〈行かせられない〉と思う気持ちが生じる】と考えられた．先行研究にある伝統的家族意識の介護は，家族がみるべきという意識が

影響しあうものであると考えられる．藤崎は，介護の思いを「介護の意味づけ」と表現し，これを「介護者自らの行為を納得させようとして持ち出す理論」を示している[19]．家族が，要介護者の気持ちを汲み取り要介護者の意思を尊重したいという気持ちは，介護負担の気持ちと揺れ動き【デイサービスはかならずしも利用する必要はない】と考え，家族がサービス利用をするかどうかについて意味づけ決定をする気持ちの変化と考えられる．ケアマネを含めた保健医療福祉従事者は，要介護者の希望意思に添いつつ家族が，介護の負担を感じながらしらずしらずに負担感を積み重ねて鬱積していくことになりかねないことを考慮し，要介護者とその家族への関わりを続けていくことが大切である．

今回得られた家族の抵抗感は家族が夫に限ってであった．この結果は家族である夫も要支援の認定を受けており，家族属性による特徴であると言いきれない．その他のキーパーソンである家族は，娘，妻であり，抵抗を感じるケースが得られず介護意識の表現に限られていた．今回得られた【家族は要介護者自身がどうしたいのかを汲み取り〈行かせられない〉と思う気持ちが生じる】ことと家族がみるべきという介護意識が影響しあい，デイサービスを利用することに躊躇することにつながると考えられた．このことは利用決定にも影響することから，家族の抵抗感については，単に抵抗感の有無だけでなく，介護意識の影響をもふまえて検討する必要があると考えられよう．

7. 研究の限界

在宅で生活する要介護者とその家族に対して，どのようなデイサービスにおける抵抗感や介護意識があるのかについて検討した．要介護者とその家族の抵抗感を同時に検討することによって要介護者と家族は，感情が揺れ動きながらデイサービス利用を含めて今どのように過ごしたいかを決めていることが把握された．したがって，本研究によってケアマネを含めた保健医療従事者が，要介護者とその家族のデイサービスの抵抗感や介護意識を同時に把握しながら介入の方向性を探るための資料となったと考えられる．しかしながら，デイサービスへの抵抗感についてはデイサービスを利用していない要介護者とその家族，デイサービスを利用している要介護者とその家族の検討であり，ペアサンプル数が少ないため，要介護者とその家族それぞれの抵抗感や介護意識の検討は十分ではない．また要介護者，家族の属性の影響についても限られたペアケースの結果であることが研究の限界である．

8. まとめ

1） 要介護者のデイサービスに対する抵抗感は，先行研究同様「制度的抵抗感」である【デイサービスに対する否定的感情】「対人的抵抗感」「サービス享受抵抗感」である【デイサービスのサービス内容・環境・利用料への否定的感情】がみられた．
2） 家族の抵抗感は，家族も要介護者である夫に限って【デイサービスに対する否定的感情】

【デイサービスのサービス内容・環境・利用料への否定的感情】がみられた．その他の家族には抵抗感はなく介護意識のみが示された．

3）抵抗感の先行研究結果の合致に加え，なんらかのデイサービスへの抵抗感や介護意識をもった要介護者とその家族は，相手の気持ちを汲み取り揺れ動きデイサービスの利用決定する可能性があると考えられた．

9. 今後の課題

今回の調査で要介護者が，デイサービスに対して「自分の中で想像し，嫌なところだと思ってしまう」「嫌なことをさせられることへの気持ち」を感じていることについてはケアマネを窓口としたデイサービス提供者側の正確な情報提供が必要であると考えられた．高齢者が，老化とともに生活機能の低下が生じた場合，デイサービスへの抵抗感があるケースにおいても必要な時にデイサービスを第二の居場所のひとつとして，より≪今≫を元気に過ごせる場所になるよう，利用者である要介護者のニーズに添えるプログラムの充実や，デイサービスの情報提供の方法についての検討が今後の課題である．

謝辞

本論文は2008年３月桜美林大学大学院国際学研究科老年学専攻修士論文を加筆修正したものである．今回の研究に当たり，協力をしてくださいました要介護者とその家族の皆様，デイサービス所長をはじめ，スタッフの皆様、介護支援専門員の皆様に心よりお礼申し上げます．

また研究，論文をまとめにあたり，ご指導賜りました桜美林大学院長田久雄教授に感謝申し上げます．

文献

1）厚生労働省ホームページ　http://www.mhlw.go.jp/
2）立川仁美，直井道子：在宅高齢者の福祉サービス利用に関す抵抗感―東京都山梨の比較　東京学芸大学紀要，第３部門55集：153−167（2004）
3）筒井孝子：介護支援専門員による居宅サービスの「適切さ」の評価に関する主観的評価．日本の地域福祉，15：28−32（2002）
4）Andersen, R., & Newman, J.F.：Societal and individual determinants of medical care utilization in the UniedStates. Milbank Memorial Fund Quarterly. Healthand Society;51;107 (1973)
5）和気純子，浅井正行他：介護保険制度５年後の高齢者の介護サービス認知と利用意向，厚生の指標，54（15），1−8（2007）
6）岸恵美子他：介護サービス利用への抵抗感を構成する意識構造に関する研究，自治医科大学看護短期大学紀要８，13−24（2000）
7）岸恵美子他：性役割意識と介護サービス利用との関係，女性心身医学，6（1）36（2001）
8）佐藤久子他：介護者におけるデイサービス利用に対する利用前と現在の抵抗感と関連要因，日本

看護学会論文集: 地域看護，31：24−26（2001）
9） 平賀睦：要介護者におけるデイサービス利用への抵抗感の要因，日本看護学会論文集: 地域看護，33：90−92（2002）
10）太田美緒他：老親扶養義務感尺度の開発，社会福祉学，42（2），130−138（2002）
11）久津見雅美，伊藤美樹子他：介護保険サービス決定における要介護者と家族の主体性に関連する要因の検討―利用者の基本属性の違い−，日本公衆衛生雑誌，51（7），507−521（2004）
12）上野佳代：要介護者とその家族におけるデイサービス利用に対する躊躇する要因，医学と生物学，154（9），396−400（2010）
13）田代和子，杉澤秀博：高齢者と家族介護者からみたデイサービス利用・非利用に関連する要因−パネル調査の分析を通して，老年社会科学，32（1），3−13（2010）
14）斉藤智子，佐藤由美：介護支援専門員が認識する対応困難事例の特徴，北関東医学会，56（4），319−328（2006）
15）Krippendorff, K；三上俊治他訳：クラウス・クリッペンドルフ著，三上俊他訳；メッセージ分析の技法「内容分析」への招待，勁草書房67−77（1989）
16）舟島なおみ；質的研究への挑戦，（株）医学書院40−65（2007）
17）東野定律，桐野匡史他：介護者における老親扶養義務感と人口学的要因の関係，厚生の指標，52（2），1−6（2005）
18）吉江悟，高橋郁他：同居家族が問題の主体となる高齢者在宅介護の対応困難事例の現状，日本公衆衛生雑誌，51，522−529（2004）
19）藤崎宏子著：高齢者・家族・社会的ネットワーク（株）（2000）初版第2冊

A study on resistance to use of day services by individuals requiring care and their families

Kayo Ueno
（Institute for Aging & Human Development, J.F. Oberlin University）

Keywords: individuals requiring care, family caregiver, day services, resistance, attitudes towards care

This study aimed to ascertain the attitudes that individuals requiring care and their families had towards care and their resistance to the use of day services. Exploratory analysis was performed through content analysis of semi-structured interviews with individuals from different backgrounds who required care and their families.

Results indicated that individuals requiring care were resistant to using day services because of “negative feelings about day services,” “negative feelings about day services provided and conditions provided” “worries about how services might affect one’s condition,” “thoughts about and hopes for their day services,” “their approach to life,” and “the sense of being put in an uncomfortable position and not leading the life one wanted to lead.” Resistance among family members was expressed only by a family caregiver (a husband) who had “negative feelings about day services” and “negative feelings about what services were provided and the conditions under which they were provided.” These results provide valuable information that should be incorporated in day services in light of the resistance individuals requiring care and their families have towards the use of those services.